

～すてきなあなたへ～

## 菅沼正子の映画招待席 44

フェイ・ダナウェイ

～アメリカン・ニュー・シネマの先駆けになったトップ女優～

### 愛の美しさが光る青春映画の名作

「俺たちに明日はない」(1967年作品)のラストシーンのあの衝撃は何年経っても忘れられない。全身に銃弾を浴び、踊るようにして絶命するあのシーン。原題は<Bonnie and Clyde>。主人公2人の名前だ。ボニー役がフェイ・ダナウェイ、クライド役がウォーレン・ベイティ。

未曾有の経済恐慌にアメリカ全土があえいでいた1930年代。無法と暴力をほしいままにして町を荒らし回っているギャングの中に、ひととき悪名高い男女の2人組、それがボニーとクライド。貧しい時代の貧しい家庭に育ち、生きる目的もなく、お互いの愛だけを頼りに、権力と富へ果敢に挑戦していく、それがボニーとクライドである。そのボニーとクライドが20代半ばにもならない若さで、非情な銃弾の前にはかない青春の命を散らせるまでの火花のような半生を描いた作品で、極力記録に忠実に映画化しているという。アクションに次ぐアクションの華々しさもさることながら、無法に生きた青春の厳しさの中に孤独な愛の美しさが光る青春映画の名作である。フェイ・ダナウェイは早くも1967年のアカデミー賞(第40回)主演女優賞にノミネートされたが、惜しくも受賞は逃した。ちなみに受賞は「招かれざる客」のキャサリン・ヘプバーンだった。

ボニーとクライドの壮烈な死を描くラストシーンの実際の日時は、1934年5月23日、ルイジアナ州アーカディアの寂しい田舎道だという。保安官たちの銃口がボニーとクライドに向かって一斉に火を噴く。マシンガン87発だったという。アメリカのギャング史上にデリンジャーやベビー・フェイス・ネルソンらと並んでその名を残しているという。この作品の監督がアーサー・ペンでなければ、これほどのビック作品にはならなかつただろう。リアリズム作家としてのアーサー・ペンの若い才能が花開き、彼も『ニュー・シネマの父』と呼ばれたのである。

## 女優志願の目標まっしぐらに

1941年1月14日、アメリカ・フロリダ州タラハシー生まれ。父親は職業軍人だったが、両親の離婚で母親に育てられた。フェイ・ダナウェイは少女の頃から女優志願というしっかりした信念で、大学も演劇科が評判のボストン大学に入学。卒業後は舞台で研鑽を積み、エリア・カザン監督に認められる。映画デビューは1967年の「真昼の衝動」。中年男の孤独を描いた異色作だが、彼女は脇役の1人でしかない。髪をブロンドに染めグラマー女優として売り出そうとしたらしいが失敗に終わった。2作目はアメリカ映画の大きな惑星といわれているオットー・プレミンジャー製作・監督の野心的力作「夕日よ急げ」(1967年)は近代化が始まったジョージア州の話で、マイケル・ケインとジェーン・フォンダが主演を張っていて、まだ彼女の出演ではない。だからこそお鉢が回ってきたのが「俺たちに明日はない」である。退廃的なヒロインを演じるにあたり10キロもの減量。それが大成功?で、<ボニー・ルック>と呼ばれたヒロインの30年代ファッションが話題を集めたのが懐かしい。

1969年の「恋人たちの場所」は絶望的な恋の激しさを描いた私の結構好きな作品。イタリア映画の名匠ビットリオ・デ・シーカが監督する珠玉の恋愛映画。人生の断崖の上に立たされた恋の姿と恋人たちの願いを描いて、切々と胸を打つ詩のような作品。不治の病におかされた女(フェイ・ダナウェイ)と、将来の設計と希望を持つ男(マルチェロ・マストロヤンニ)との巡り合い。激しくはかない恋。エラ・フィツジェラルドが歌う主題歌もよかった。

私はフェイ・ダナウェイという女優は美人とは思えないが、変幻自在に絶えず妖しい魅力を発散していて、男を狂わせる女だなあと、つくづく思うのだ。男の心をそその唇、その唇からこぼれる白い歯、悲しげで物憂い大きな瞳。男殺しの女優である。

70年代前半は人気スター、リチャード・チェンバレンが主演する「三銃士」「タワーリング・インフェルノ」など大型作品の顔見せ程度の出演が気になっていたが、2度目のオスカー主演女優賞候補作「チャイナタウン」(1974年・第47回)のヒロインを経て、シドニー・ルメット監督作「ネットワーク」(1976年、第49回)でみごとアカデミー賞主演女優賞に輝いた。シドニー・ルメット監督といえば、忘れられないのが不朽の名作「十二人の怒れる男」(1957年)。12人の陪審員により、17歳の殺人容疑者が無罪評決になる、という内容。この映画のように、えん罪などないような社会でありたいものだ。

話を「ネットワーク」に戻そう。視聴率という魔物に操られているTV界の恐るべき全貌を描く衝撃作だ。1本の番組が製作されるにあたってのネットワーク・システムの驚くべきカラクリ、ぞっとさせる人間関係、さらには公正であるべきニュースの腐敗、娯楽番組の扇

情化、高度に発達した競争社会をどのように生き抜いていくのか。フェイ・ダナウェイが演じるダイアナというキャラは、並外れた美貌と才気を武器に、一介のTVリポーターから編成局主任の地位をものにした凄腕。落ち目のニュースショーを立て直すため、破滅と表裏一体のすさまじいアイデアを繰り出す。1つのメカニクな社会が行き着くところまで行ったとき、ダイアナのような怪物的美女が生まれるのかも知れない。キャリアに生きる女性のエゴと悲しみの演技、フェイ・ダナウェイにはまさにドンピシャリのキャラクターだ。

### インパクト絶大の女優

「ルーという女」(1970年)のように、役名がタイトルになった作品もある。アメリカ・ファッション界の裏側と、1人の美しいトップモデル、ルーの生き方を冷酷なまでに掘り下げた作品。精神的に泥まみれになって生きるルーという難役をフェイ・ダナウェイが演じて作品全体をピリッと引き締めている。監督はアメリカ・ファッション写真家として斬新な作風で知られるジェリー・シャツバーク。彼の映画監督デビュー作でもある。

私の好きなルネ・クレマン監督作品も紹介しよう。戦争の悲惨さを描いた「禁じられた遊び」やアラン・ドロンが一躍スターになった「太陽がいっぱい」など映画史に残る傑作多数で、映画史には欠かせない巨匠としての声価不動の監督。今回紹介したいフェイ・ダナウェイ主演作の「パリは霧にぬれて」(1971年)なんてロマンチックなタイトルだけれど、実はサスペンス映画。ルネ・クレマン監督にはこういう驚きがある。霧深いセーヌのほとりに住むアメリカ人夫妻の家庭に焦点を当てながら、夫妻の愛情のさまざまな形をきめ細く描き、子供の誘拐という恐るべきワナを通して、現代人の不安を浮き彫りにする。

フェイ・ダナウェイがこんな映画に？とアッと驚く作品も紹介しよう。「スーパーガール」(1984年)である。あのスーパーマンシリーズ同様、人気コミックが原作で、スーパーマンのいとこという彼女は、ピチピチのハイティーン美女。超能力を持ち、走る速さは電光石火、頭脳明晰、その上知的でエレガント。まるで今議論されているチャット GPT のよう。このスパークリング・ファンタジーの中で、彼女が演じるのはセレナという魔女。世界征服を狙ってスーパーガールと火花を散らす美貌の魔女。意地が悪く、何をやってもダメな三流どころの魔女なのに、いつの日か地球を征服しようという野望を抱いている。フェイ・ダナウェイならやるかも？だが、こういう喜劇的な演技も披露して、さすが役者だなと思う。

1980年代からはTV番組にも出演、1984年「Ellis Island」でテレビ映画・ミニシリーズ部門でゴールデングローブ賞助演女優賞受賞。2018年公開の「ダブル/フェス」ではニコラス・ケイジの母親役を演じているが美貌は失われていない。恋多き女と言われ、エリア・カザン、ジェリー・シャツバーク、マルチェロ・マストロヤンニ、ハリー・ユーリンなどと

の関係が知られているが、1974年歌手のピーター・ウルフと結婚・離婚、1983年カメラマンのテリー・オニールと結婚・離婚、1児あり。

☆☆☆☆☆

菅沼正子さんのプロフィール：静岡県出身、フェリス女学院短大英文科卒業後、映画雑誌『スクリーン』編集部勤務後、フリーランスの映画評論家として、旺文社、集英社、講談社の雑誌などに執筆。著書に『女と男の愛の風景』（マルジュ社）『スター55』（筑波書房、アマゾンの電子版あり）『エンドマークのあとで』（マルジュ社、アマゾンの電子版あり）。2003～2005年のNHKラジオ深夜便「菅沼正子の思い出のスクリーン・ミュージック」に出演、宇田川アナウンサーとの軽やかなやり取りが印象的でした。

ミニコミ誌「すてきなあなたへ」には30号（2002年）から終刊号70号（2015年6月）まで「菅沼正子の映画招待席」として、新作映画を紹介しています。ご覧になりたい方は、本ブログ左欄のマイリス「すてきなあなたへ」へどうぞ。（内野光子記）